



ながら自分たちが兄や姉であるような気持ちでいるらしく、いたわりの気持、かわいがってあげるという気持も多分にあるらしい。

年少の方では、最初は多少興奮状態にあらしく、かん高い奇声をあげる者、何となく調子にのってさわぐ者、依頼心が強くなり、新しい先生にくつついて、何もかもしてもらおうとする者、何となく友だちの仲間にはいらぬ者、おもしろい回数かふえた者、などいろいろあった。これらの子どもたちは入園以来、その傾向があったのが、最近やとよくなりかけていたところであり、いささか元にもどった形らしい。S子(一月生・二人姉妹の末子)は急に甘えるようになり、今まで自分でしてきたことも「出来ない先生やって」と言い、先生のそばにしていることが多くなった。また今まで幼稚園ではとても消極的な性質だったA子(十月生・三人姉妹の二番目)は、先生に自分を認めてもらおうと、他の子どもに先生が話しかけているときでも「私は! 私は!」とことごとくに言うような状態が二週間続いた。この例は、家庭で新しい弟妹が出来たときに表す一時の変化に通じる

ものと思われた。しかしこれも一時的の現象で二、三週間のうちに、むしろよい方向に向かってきた。S子も友だちと遊ぶようになってきたし、他の者はむしろ生活に張りが出てきたようである。三月生まで一切幼稚園で組の友だちから相手にされなかった子どもが、新しい組の子どもたちに可愛がられ仲間に入っていることもこの子にとって幸であった。

また遊びのグループは、はじめは自然のままでは、組別に遊びのグループが出来ることが多かった。比較的両方の組がまぎってグループが出来た遊びは、ままごと、外遊びの自動車、砂場などであった。ままごととは二軒に分かれて遊んだりした。一つのグループに参加する人数が多いので、あそびがやや組織だつて大規模になつてきたようにも見られた。またその反面、一時は仲間に入れてくれない、遊具をかしてくれない、とかいうことでけんかもあった。が、やがて遊具を話合いでわかる機会を多く経験するうちに、だんだんけんかなして遊具をわけることが出来るようになった。ぼんやり遊びに入らない子どもも時々出来るのでその方の誘導にも留意した。また

遊びのグループが片よらないよう、なるべく交流をはかつて、なお遊びが発展するように指導したり、集団遊びなども入れて大ぜいの友だちと遊ぶように気を配った。四週間めぐらいから、いろいろな点で組別の区別はほとんど見られなくなった。

合併してみても、二組で非常に差のあることは、年少だけに何といつても食事のたべ方は、こぼす程度、描画や鉄を使うことなど、洋服のぬぎ着などが目立ち、生まれてからの生活経験を物語っていることを感じさせられた。しかし、このために幼稚園がいやになつたなどという子どもはなかった。家庭では新しい友だちの名前を覚えて、一しよに遊んだことなど話しているとしばしばうかがつた。

要するに、三才児も二期も半ばを過ぎると相当に友だち関係もでき、幼稚園の生活をものにしていくようなので、十五人一組よりも二組一しよで生活した方が何かと刺激も多く、生活経験の範囲も拡がるのでよいのではないかと思う。そして、指導方法や實際を研究することは勿論であるが、同時に、その時期ということが大きな問題ではなからうか。